

第 28 回ドイツ語教育研究ゼミナール報告 (T. Kobayashi) [J]

第 28 回ドイツ語教育研究ゼミナールは、2024 年 3 月 11 日から 13 日の 3 日間、トーセイホテル&セミナー幕張（千葉県習志野市）にて開催された。

今回の教育研究ゼミナールでは、ビーレフェルト大学（Universität Bielefeld）から Claudia Riemer 教授を招待講師として招いた。Riemer 教授は Deutsch als Fremd- und Zweitsprache を専門とし、教員養成（とりわけ教師の専門化）の分野において、言語教育・学習研究、DaF/DaZ の教授法（特に授業原理・相互作用）、実証的外国語研究（質的研究）における研究の方法に関する理論の研究に取り組んでいる。

ゼミナールのテーマおよび参加者は以下の通りである。

総合テーマ：「ドイツ語の授業における教科書の役割 — 学習理論的、そして方法論的・教育学的な原則についての考察と、その教科書による、または教科書によらない実践」(Zur Rolle des Lehrwerks im DaF-Unterricht – Überlegungen zu lerntheoretischen und methodisch-didaktischen Prinzipien sowie deren Umsetzung mit und ohne Lehrwerk)

参加者： Elvira Bachmaier*（麗澤大学）、阪東知子（明治大学）、Cezar Constantinescu（明治学院大学）、Martina Gunske von Kölln（福島大学）¹、堀口順子（九州大学）、Alexander Imig（中京大学）、亀井明子（奈良女子大学）、Nina Kanematsu*（筑波大学（上智大学））、Jana Klacanska（金沢大学）、小林大志（東北大学）、小池駿*（早稲田高等学院）、小西優葉（上智大学・学部生）、小西優貴（同志社国際中学校・高等学校）、草本品（麗澤大学）、中川慎二（関西学院大学）、西出佳詩子（大阪大学）、太田達也（南山大学）、齋藤正樹*（早稲田大学）、Maria Gabriela Schmidt**（日本大学）、Monika Sugimoto（京都外国語大学）、鈴木友美加（名古屋大学・大学院生）、高次裕（中央大学）、武井佑介*（麗澤大学）、牛山さおり*（立教大学）²、Bertlinde Vögel（大阪大学）、和田資康（関西学院大学）、Carsten Waychert*（京都産業大学）、Nancy Yanagita*（獨協大学（上智大学））（アルファベット順、**実行委員長、*実行委員、¹オンライン参加、²ゼミ当日は不参加だったが、実行委員のため氏名を記載する。）

第 28 回ドイツ語教育研究ゼミナールプログラム

	11.03	12.03	13.03
Vormittag		Workshop 1	Workshop 3 Besprechung und Evaluation
		Vortrag 2	

Nachmittag	Anreise	Teilnehmervorträge	Abreise
	Begrüßung und Kennenlernen	Vortrag 3	
Abend	Vortrag 1	Workshop 2	
	Einstiegsaufgabe	Abendessen mit Netzwerktreffen	
	Vortrag		

1. 招待講師による講演およびワークショップ

Riemer 教授による講演とワークショップは、3 日間で計 3 回ずつ行われた。講演は「ドイツ語の授業における教科書の役割」「教科書や教材の扱い」を総合的なキーワードとし、互いに密接に関係する 3 つのテーマ（1. Zur Rolle von Lehrwerken im DaF-Unterricht – Funktionen und Nebenwirkungen / 2. Didaktisch-methodische Prinzipien und Lehrmaterialien für den DaF-Unterricht an der Hochschule / 3. Impulse für die Lehrmaterialadaption）で進められた。ワークショップ 1 は講演 1 と対になり、ワークショップ 2-3 は講演 2-3 と一体的につながっている。また、このゼミナールでは、開催に先立って、参加者が Moodle 上でアンケートと準備課題に取り組んだ。ゼミナールでは、アンケートの結果についての議論が、エントリータスクとして行われた。

教科書は従来、ドイツ語の授業において大きな（時に過大な）役割を果たしてきた。今日もなお、教科書は第一の教材であり続けている。教科書の使用は学習者にとっても教員にとっても多くのメリットがあるが、デメリットも存在する。教科書を生かすも殺すも教科書を使う教師次第であり、ドイツ語教師にとって、自省的かつ熟達して教科書を扱うことは重要である。ゼミナールでは、教科書の評価、分析方法、アダプションによる教科書の限界を乗り越える方法などが議論された。

【講演 1】

初日の午後、Riemer 教授による最初の講演 „Zur Rolle von Lehrwerken im DaF-Unterricht – Funktionen und Nebenwirkungen“ が行われた。この講演では、ドイツ語の授業における教科書の役割や、教科書を使うことのメリットとデメリットが話題とされた。教科書を使用するメリットとして、教師にとっては、教科書を使用することで授業準備の負担が軽減することや、質の保証が得られること、教材や授業内容についてのインスピレーションが得られること（「石切り場」としての教科書）が、学習者にとっては、「今、何を学んでいるのか」が把握できることや、学習の自主的コントロールが可能となることなどが指摘された。一方、教

科書のデメリットとしては、内容がすぐに古びてしまうことや、多様なクラスの状況やニーズに対応できないこと、授業内容を過度に規定し、制限してしまう（「暴君」としての教科書）ことが指摘された。また、教科書を使わない授業の試みとして、英語教育における *Dogma-Bewegung* が紹介された。

この講演では、教師による教科書の扱い方の重要性が強調された。この講演で示された「暴君」と「石切り場」の中間点を見つけること、という命題はゼミナールを通じて繰り返され、私たち自身の教科書との関わり方を考え直すきっかけとなった。

【エントリータスク】

講演1の後、ゼミナールの開催に先立って参加者が Moodle 上で解答したアンケートの結果が紹介され、その内容をめぐって議論が行われた。

【ワークショップ1】

ワークショップ1は講演1の内容に関連している。今回のゼミナールでは、準備として、参加者が、自身が使用したことのある教科書を持ち寄った。このワークショップはペアワークで行われ、各自が持ち寄った教科書から使用経験のある教科書とない教科書の2冊を選び、それぞれの課を一つ選んで、比較を通じた分析を行った。Riemer 教授も台湾やカメルーンで使用されている教科書を含むいくつかの教科書を用意し、これらの教科書を分析したペアもあった。

他の参加者が持ち寄った馴染みのない教科書に触れ、馴染みのある教科書と比較することで、自身が普段使っている教科書の思いがけない特徴に気づき、授業内容についての新たなアイデアを得ることができた。

【講演2】

2日目午前の講演は „Didaktisch-methodische Prinzipien und Lehrmaterialien für den DaF-Unterricht an der Hochschule“ というテーマで行われた。はじめに、第二言語習得が複雑な認知プロセスであり、非常に個人的であることや、授業が教師と学習者の社会的な相互作用であること、（教室内外での）偶発的な学びの意義などが確認された。こうした複雑性や、教室外で生じる学びの重要性ゆえに、授業について具体的な行動指針を得ることはほとんど不可能であるが、授業設計の一般的な原則についていくつかの示唆を得ることができる。講演では、その一般的原則が教材にも反映されていることが指摘された。

その後、一般的指導原則の網羅的なリストが提示され、その中から中心的な指導原則として、「学習者志向 (Lernendenorientierung)」、「活動志向 (Handlungsorientierung)」、「タスク志向 (Aufgabenorientierung)」、「多言語志向 (Mehrsprachigkeitsorientierung)」の4つの原則が取り上げられた。それぞれの原則についての説明がなされた後、その原則がどのように教材に反映されているのか、具体的な例とともに紹介された。

【講演 3】

2 日目午後の講演は „Impulse für die Lehrmaterialadaption“ というタイトルで行われた。講演のはじめに、教科書のポテンシャルがどのように発揮されるかは教科書そのものではなく、教師がその教科書をどう使うかにかかっているという命題が改めて確認された。その後、教科書の限界を越えるために、教科書の一部を省略したり、自分で書き直したり、既存の別のものと置き換えたりするアダプションの重要性が示された。さらに、オーセンティックな素材を使ってコミュニケーション・活動志向の教材を作成するための原則としての IKEA-R-Prinzip (I-Identifizieren, K-Kramen, E-Erarbeiten, A-Ausführen, R-Reflektieren) と AHA-Effekt (A-Analysieren, H-Hinzufügen, A-Anwenden), コミュニカティブな学習タスクの開発とアダプションの原則として学習目標とタスクをはじめに設定し、そこに向かうまでのエクササイズを計画していく逆向き設計が紹介された。

【ワークショップ 2】

このワークショップは、講演 3 の内容と関連づけて、参加者がグループで相談して教材のアダプションを実際に行ってみるという形で進められた。ワークショップには「既存の教科書の教材を調整し、具体的な学習者グループに適応させる」または「他の教材からヒントを得て教材を自分たちで開発する」という 2 つのタスクが用意され、各グループは、ワークショップ 1 で分析した教科書や、あらかじめ Moodle 上で共有されていた、参加者自作の補助教材（事前課題の成果）を用いて、2 つのタスクのいずれかに取り組んだ。作業にあたっては、講演 2 で示された授業設計の一般的な原則から 2 つの観点を選んで考慮に入れ、教材に反映することも求められた。

【ワークショップ 3】

3 日目午前に行われたワークショップ 3 では、はじめに、ワークショップ 2 の作業を完了し、その成果を発表するための準備が行われた。その後、各グループによる成果が発表された。最後に、振り返りとして、将来的な教科書の役割についての展望について、各参加者の意見がまとめられた。教師としての視座からの意見だけでなく、学習者の視座からの意見、そして出版社の視座からの意見も集められた。

2. アジアゲストによる講演

1 日目午後にはこのゼミナールのアジアゲストである輔仁大学（台湾）の Christoph Waldhaus 助理教授の講演が行われた。講演は „Die Konzeption von Lehrmaterialien unter Verwendung der Komplexen Dynamischen Evaluation (KDE)“ というタイトルで行われ、大学での外国語教育において教材開発に複合的動的評価モデルを採り入れる意義が紹介された。

3. 参加者による発表

2日目午後には参加者による研究発表が行われた。発表のタイトルは以下のとおりである。

- Cezar Constantinescu: Chancen und Herausforderungen des Unterrichtens mit einem auf Online-Ressourcen fokussierten digitalen Lehrwerk
- Shinji Nakagawa: Interkulturelle kommunikative Kompetenzen und Mediation - Versuch einer Lehrwerkanalyse aus der Sicht der politischen Bildung
- Yoshiko Nishide: Aktives Lernen durch Videoproduktion - im Hinblick auf den asynchronen Austausch zwischen deutschen und japanischen Studierenden

4. 総括

第28回ドイツ語教育研究ゼミナールは、人々の社会的な交流の再開が本格化する中、従来のドイツ語教授法ゼミナールから名称を変え、新しい場所で活気に満ちた雰囲気のもと開催された。この数年間、多くの教師が従来とは異なる授業実践を経験したことで、教師の教科書への関わり方にも様々な変化があった。そうした中で、Riemer教授の講演を通じて教科書との関わり方を熟考し、ワークショップにおいて実際にアダプションに取り組んでみることは、大変有意義な経験であった。このゼミナールで得た知識や経験は、各参加者の今後の授業運営に活かされるに違いない。

なお、ゼミナールの実施にあたっては、日本独文学会、DAAD、ドイツ語学文学振興会、Goethe-Institut から多大な支援をいただいた。この場を借りて改めてお礼を申し上げたい。

小林 大志（東北大学）

0200

作成日 : 2024/05/25